

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 28日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520494

研究課題名（和文） 日本語諸方言における意味的隣接表現の文法体系への取り込みに関する研究

研究課題名（英文） Study on Some Grammatical Forms in the Japanese Dialects Derived from their Semantic Contiguity Expressions

研究代表者

三井 はるみ (MITSUI Harumi)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・構造研究系・助教

研究者番号：50219672

研究成果の概要（和文）：

「意味的隣接表現の文法体系への取り込み」（元来別の表現分野に属する形式が、隣接の表現分野の基本的形式に代わるものとして用いられる現象）の例として、九州西北部方言の順接仮定条件表現形式「ギー」、引用・伝聞表現トイウ類の文法化形式、対称詞由来の間投助詞を取り上げ、用法・体系と変化プロセスを把握するための調査・分析・考察を行った。これにより、方言の文法体系のバリエーションの生じる過程と背景の一端を具体的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Our subjects of the research are as follows.

- the usage of conditional morpheme "gii" and its geo-linguistical distribution in the dialects of Northwestern Kyushu
- the usage of the interjectory particles derived from the personal pronouns of the second person and their geo-linguistical distribution in the dialects of Western part of Japan
- the usages of some grammaticalized forms derived from the citation form "toyuu" and their process of changes in the Tohoku dialects

By this research a part of the process in which the variations of the grammatical systems was produced became clear.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言，言語変化

1. 研究開始当初の背景

(1) 方言文法の研究では近年、『方言文法全

国地図』（国立国語研究所編，1989-2006）の完結によって、主要カテゴリーにおける

文法形式の地理的分布状況が全国的に把握できるようになるとともに、現代共通語文法研究の成果を取り入れた、文法体系の記述的研究の進展が著しい。アスペクト、可能表現等をはじめとして、カテゴリーごとに、観点を網羅した共通の調査票による記述調査がなされ、対照方言学、類型論、言語変化研究等の立場からの分析が重ねられている。

(2) 方言の文法体系のバリエーションの生じる原因の一つとして、文法化の程度の違いが注目されるが、『方言文法全国地図』を見ると、これと関連すると思われる現象として、「意味的隣接表現の文法体系への取り込み」とでもいべき現象を見出すことができる。

(3) 元来別の表現分野に属する形式が、隣接の表現分野の基本的形式に代わる（あるいはそれに準ずる）ものとして用いられる背景には、その方言の文法体系、および、言語運用の中に、その変化を許す（あるいは必要とする）、共通語や他方言とは異なる事情があると考えられる。

(4) 本研究は、『方言文法全国地図』の中に豊富に見いだされる同様の事例を、このような観点から総合的に捉え直し、個々の例に関してその背景を明らかにするとともに、言語変異・言語体系・言語変化研究上の意味づけについて考察を行う。

2. 研究の目的

日本語諸方言に見られる「意味的隣接表現の文法体系への取り込み」（元来別の表現分野に属する形式が、隣接の表現分野の基本的形式に代わるものとして用いられる現象）の事例を収集・分類し、主要タイプの事例について、文法体系への取り込みのメカニズムを分析するとともに、言語変化上の位置づけについて考察する。

3. 研究の方法

本研究は、次のような段階を追って行う。

(1) 『方言文法全国地図』を初めとする先行研究から「意味的隣接表現の文法体系への取り込み」と見られる事例を広く、網羅的に収集する。

(2) 問題の広がり の把握と、類型化を行う。

(3) 主要タイプの事例について、臨地調査・談話データの分析等に基づく記述を行う。また、地理的分布状況を変化把握の手がかりとする。

(4) (1)～(3)に基づいて、言語変異・言語体系・言語変化研究の観点から、この現象の意味づけについて考察する。

4. 研究成果

(1) 事例

検討の結果、「意味的隣接表現の文法体系への取り込み」の具体的な事例として、九州西北部方言の順接仮定条件表現形式「ギー」（三井）、引用・伝聞表現トイウ類の文法化形式（日高）、対称詞由来の間投助詞（井上）を取り上げることとした。

以下では、研究代表者が担当した、順接仮定条件形式「ギー」について詳述する。

(2) 九州西北部方言の「ギー」

「ギー」は、動詞連用形からの転成名詞「きり」に由来すると考えられるが、現在、佐賀県方言（特に佐賀西部方言）では、順接仮定条件表現を担う中心的な形式となっている。

▶ アシチャ アメノ フッギー フネワ デランヤロネー。(明日雨が降れば、船は出ないだろうね。)(佐賀市・1930年生・女)

順接仮定条件を表す方言特有形式は全国的にも数少ない。なお「ギー」類には多くの形態的バリエーションがある。本研究では「ギー」を代表形として扱った。

(3) 方法

この形式の用法・体系と変化プロセスを明らかにするために、① 代表地点における、体系記述・変異把握のための臨地面接質問調査、② 時間的推移を把握するための、複数の地理的分布調査の比較を行った。また、③ 意味用法について、量的側面を考慮に入れた分析を行うために、当該地域方言による昔話文字化資料の電子化を行った。

(4) 臨地調査の対象地域

臨地面接調査は、

① 佐賀県佐賀市（高年層・若年層）

② 佐賀県武雄市（高年層・若年層）

③ 長崎県壱岐市（高年層）

において行った。いずれも「ギー」類（「きり」に由来する形式）が用いられる地域であるが、先行研究から、佐賀県方言では、形式の変化が進み、用法が広く、使用頻度が高い一方、壱岐島方言では、形式が原形に近く、用法が限定的で、使用頻度が低いことが予想された。

(5) 佐賀県方言の「ギー」
「ギー」類優勢地域である佐賀県における、「ギー」の意味・用法、使用状況については、地域差・世代差を含め、次のことが明らかになった。

地域差としては、

- ① 東部地域(佐賀市)高年層では、「ギー」は、共通語の「ば」「たら」「と」の持つ意味用法のほぼ全体をカバーする。
- ② 西部地域(武雄市)高年層では、これに加えて、共通語では「なら」のみが担う認識的条件文にまでおよぶ広い用法が安定的に認められる。このように広い用法をもつ順接仮定条件表現形式は、全国的に見ても稀である。
- ③ 「なら」と同様、従属節末でのテンスの分化を有する。

世代差としては、

- ① 東部地域(佐賀市)若年層では、「ギー」という形式の使用が減少し、限定的な文脈でのみ使用される傾向にある。
- ② 西部地域(武雄市)若年層では、「ギー」という形式を保持しながら、一方で、認識的条件文とそれ以外、という意味の違いによる形式の分化が認められる。

(6) 武雄市方言の「ギー」の意味・用法
「ギー」が最も広い意味・用法を持つ佐賀県武雄市高年層(上記(5)②)について、使用した調査票の用法分類によって示すと、次のとおりである。

[用法]

A. 従属節用法

- a. 仮説的用法(予測的条件), b. 仮説的用法(認識的条件), c. 反事実的条件, d. 一般条件, e. 反復習慣, f. 前置き, g. 事実的用法のすべてで使用される。
- h. 並列・列挙用法では使用されない。

B. 非従属節用法

- a. 助動詞的用法では、反事実、勧め、禁止の用法で使用される。義務も可能。
- b. 終助詞用法では基本的に使用されない。
- c. 接続詞用法で使用される。

[接続]

活用語の終止形、非過去形と過去形に接続する。過去形に接続するのは、A従属節用法のうち、b. 仮説的用法(認識的条件)で、前件が過去に成立している事実である場合と、g. 事実的用法の場合である。いずれも、過去形が過去時制を担う。

(7) 壱岐島方言の「ギー」類
「ギー」類優勢地域である壱岐島におけ

る「ギー」類の意味・用法について、次のことが明らかになった。

① 原形に近い「ギリ」という形式が使われる。

➤ アシタ オーカジェノ フキヨルギリ フネワ デンメーモン。〈明日大風が吹いていれば、船は出ないだろう。〉
(壱岐市・1931年生・女)

② 他に、より有力な順接仮定条件表現形式が複数あり、「ギリ」の使用頻度は低い。使用年齢層は高年層に限られる。

③ 共通語の「ば」「たら」「と」の持つ意味・用法に加え、「なら」の意味・用法でも使われる。

④ 非過去形と過去形に接続するが、テンスを担う場合と担わない場合がある。

③については、用法が限定的であるという、先行研究からの予想と異なるものであり、今後さらに調査を行う必要があると考えている。

(8) 地理的分布の資料

地理的分布に関しては、『方言文法全国地図』の他、これまで詳細な分布情報が公表されていなかった、九州方言学会の広域調査(1964-1965年実施)による、老少二世代の分布地図を検討した。調査資料(別府大学所蔵)を閲覧・複写させていただき、電子化・地図化を行った。これにより「ギー」類の分布地域とその時間的推移を把握した。

(9) 九州方言学会調査二世代分布図

九州方言学会の二世代分布地図から、「ギー」の分布について次のことが読み取れる。

① 老年層地図(図1)

「ギー」は、佐賀県・長崎県を中心に、天草から熊本県南部・鹿児島県にかけての〈西岸部エリア〉、および福岡県に点在する。この分布領域は、『方言文法全国地図』(1979-1982年調査)と比べて広い。特に、長崎県・福岡県の、佐賀県から離れた地域に「ギー」が広がっていることが目立つ。『方言文法全国地図』より古い状態が示されていると見られる。

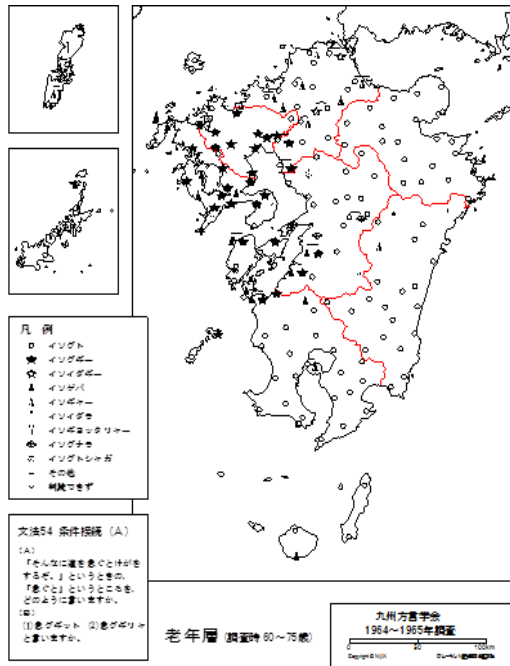


図1

② 少年層地図 (図2)

「ギー」は、老年層と同じく、佐賀県と長崎県東部を中心に分布する。しかし詳細に見ると、福岡県および、熊本県南部・鹿児島県にかけての西岸部エリアという、佐賀・長崎エリアから離れた地域に、老年層にあった「ギー」が見られなくなっている地点が散見される。逆に、佐賀県・長崎県とその隣接エリアでは、老年層には見られなかった「ギー」が少年層で現れている地点がある。

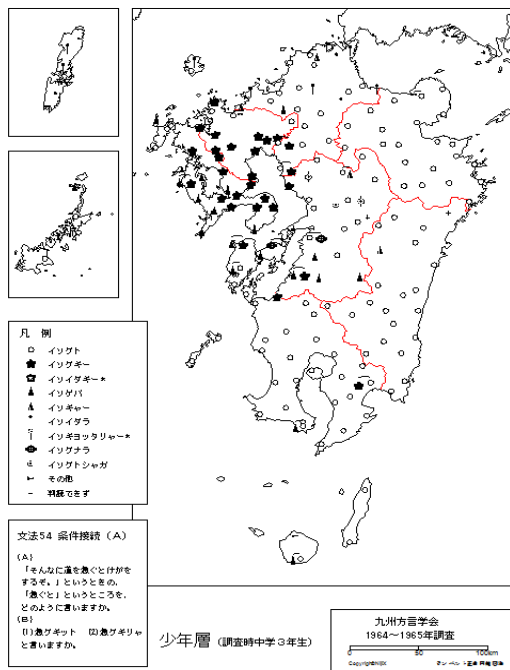


図2

(10) 地理的分布の時間的推移

(9)から、近年の「ギー」類の地理的分布の時間的推移は次のようであったことが明らかになった。

「ギー」はもともと九州西北部に広く分布していたが、1965年時点で、佐賀・長崎エリアでは勢力があり、若い世代で使用が増えている一方、そこから離れた地域では衰退しつつあった。また、『方言文法全国地図』の分布状況を考え合わせると、その間長崎県でも衰退が進み、現在「ギー」の使用は、佐賀県で最も盛んである。

(11) 形態的バリエーション

九州方言学会調査から知ることのできる、「ギー」類の形態的バリエーションとその分布は、次のとおりである。

本研究で代表形としている「ギー」は佐賀県のみ分布する形式である。他には、「ギリニワ」に由来するとみられる語形(ギーニャー、ギニャー、ギニャ、ギンニャ)が主に長崎県に、「ギリト」に由来するとみられる語形(ギット、ギント、ギト)が主に福岡県西部と、熊本県南部から鹿児島県にかけての西岸部に分布している。

(12) 「ギー」類の成立・変化プロセス

以上の検討から、「ギー」類の成立・変化のプロセスについて、次のような見通しを得た。

九州西北部の複数の方言の中に位置づけると、佐賀県(特に東部)方言は、「ギー」の意味・用法が広く、類義表現が少なく、安定的に用いられている。同時に、形式が最も単純で、地理的分布の推移の上では、全く衰退の様相を見せていない。むしろ他の方言と異なり、ある時期までは使用地域を近隣に拡大する勢いであった。形式の単純化と意味・用法の拡大が同時に観察されることから、この形式の成立と変化の過程には、文法化のプロセスが関わっていることが強く推測される。

なぜ、佐賀県の特に関東部で、「ギー」類が拡大したのかについては、意味用法の広さと類義形式の少なさが、この形式の使いやすさにつながり、盛んに使用される基盤として働いていると見られる。全国の順接仮定条件表現形式を見渡すと、近畿地方を中心に、「タラ」が広い意味・用法で盛んに使われ、現在その地域を拡大していることが知られている。類義形式が少なく劣勢であることを含め、佐賀県方言の「ギー」は、近畿地方の「タラ」と状況が類似している。

(13) 課題

特に、前提となる、「ギー」の広い意味・

用法がなぜこの地域で成立したか、ということについては、検討の余地がある。この地域の順接仮定条件表現の体系の中に、契機が存在するものと予測される。九州西北部方言では、「バ」「ナラ」「トキヤー（<時は）」等の用法が、共通語とずれていて広く、予測的条件と認識的条件をまたいだ使用も見られることが、調査の中でうかがわれた。この点を明らかにすることは次の課題である。

名詞「きり」から、順接仮定条件表現形式への変化のプロセスについては、従属節末で順接仮定条件に近似した意味を担う用法(共通語の、「ここにいるかぎり、安全だ。」に類似)が出发点となっていると考えるが、現代方言や地方語文献での証左はまだ得られていない。これも課題である。

(14) その他のテーマ

この他、分担者の井上は、言語地図と談話資料を用いて、対称詞由来の間投助詞について考察を行った。日高は、主として方言による昔話資料を用いて、引用・伝聞表現トイウ類の文法化形式と、元来の引用の助詞トとの意味分担のありようとその地域差について考察を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 三井はるみ (2011. 12) 「九州西北部の順接仮定条件形式「ギー」の用法と地理的分布」『國學院雑誌』112-12, pp. 26-39) 査読なし

[学会発表] (計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三井 はるみ (MITSUI Harumi)

大学共同利用期間法人人間文化研究機構
国立国語研究所・理論・構造研究系・助教

研究者番号：50219672

(2) 研究分担者

井上 文子 (INOUE Fumiko)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授

研究者番号：90263186

日高 水穂 (HIDAKA Mizuho)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80292358

(3) 連携研究者
なし